2020 年度
ボランティアセンター
年間活動報告書

フェリス女学院大学ボランティアセンター

2020 年度ボランティアセンター年間活動報告書　目次

はじめに　ベンヤミン　ミドルトン教授　1

Ⅰ　フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業

１．中期計画（17―20PLAN）　2

２．2020 年度の活動をふりかえって　3

Ⅱ　2020 年度活動報告

学生主体の企画と連携

【国際・平和人権】

アンネのバラ　7

「杉原千畝生誕 120 年記念講演・杉原千畝とリトアニア」　8

【教育支援】

緑園東小学校　ふれあい学習サポート（オンライン）　10

「デニスホップ」オンライン学習支援（踊り場地域ケアプラザ）

「コミュニティだんだん」オンライン学習支援（子ども食堂）　11

【多文化共生】

外国籍住民学習支援と出会い　@多文化まちづくり工房　13

外国につながる子どものための学習支援　@ABC フリースクール

【地域と共に】

NPO インターンシップ（NPO 法人横浜 NGO ネットワーク）　14

寿町炊き出し・夜回り・バザー　15

【環境保護】

使用済み切手・書き損じハガキ収集　16

ペットボトルキャップ収集

【国際協力・SDGs】

なら国際映画祭 2020 ボランティア　17

NPO 法人鎌倉ユネスコ協会　「SDGs みらい塾オンラインワークショップ」　18

【防災】

国際シンポジウム「日本と減災教育―ESD・SDGs の取り組みからみた減災の街づくりと海外とのパートナーシップ」　20

学生スタッフ研修会・イベント

2020 年度　学生スタッフオンライン勉強会　25

2020 年度　第 1 回学生スタッフ研修会　26

2020 年度 第 2 回学生スタッフ研修会（他大学交流会） 30
2020 年度 第 3 回学生スタッフ研修会（オンライン研修旅行） 31

学生のボランティア活動報告（オンライン）

【教育・子ども支援】

「子ども食堂」学習支援（だんだんの樹） 国際交流学科 2 年 33
「子ども食堂」学習支援（だんだんの樹） 国際交流学科 2 年 36
小中学生の学習支援（踊り場地域ケアプラザ） 国際交流学科 2 年 39

Ⅲ　ボランティアセンター資料

ボランティアセンター規程 42
ボランティアセンター運営委員会規程 44
ボランティアセンター運営方針 46
2020 年度活動実績 47
アンケート結果 49

おわりに 堀尾藍コーディネーター 51

表紙写真・裏表紙写真：アンネのバラ

はじめに

ボランティアセンター長　ベンヤミン　ミドルトン

初めに、COVID-19 による犠牲となった方々に哀悼痛惜の念を述べたい。
当センターでは、長年、現場での活動を重視してきたが、今年（2020 年）度は COVID-19 の影響を受け、対面での授業の実施も難しいと文部科学省および大学の新型コロナウイルス対策本部が判断し、オンライン授業に転換となり、それに付随して急遽、当センターによるボランティア活動もオンラインに転換する必要となった。

当センターでは、地域との連携、行政や他大学、外務省や国際機関等との連携している。学生が授業で学んだこと、個人で興味を持って調べたことを軸に当センターが派遣する団体・機関のボランティアは、常駐したスタッフの数、安定しているか、次世代の育成に適しているか、学生を労働の対価としていないか、等様々な項目を元に精査しているが、最も大切なことはボランティア活動に参加している学生自身が「社会に貢献しながら、有意義な活動をしているのか」である。学生に安全尚且つ有意義な活動をして貰える場を提供することが当センターの任務である。

学生団体より、ボランティア派遣の基準が少し高くはなるが、本学の「For Others」という教育理念で充実させたボランティアは、学生の安全を最優先にしながら、学生が国内外の課題解決の担い手として活躍できるように調整している。

この場をお借りして、この COVID-19 禍に支えて下さったボランティアの派遣先、関係者に厚く御礼を申し上げたい。

2021 年 3 月

Ⅰ　フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業（2020年度）

１．中期計画（17－20PLAN）

中期計画は大学全体で取り組む「フェリス女学院大学 17－20PLAN」の中に位置づけられ、ボランティアセンターとしては、以下の計画を実施した。（優先順位による）

中期目標 中期計画名称	事業計画名称	2020 年度の成果
キリスト教精神／For Others の実践 **建学の精神と教育理念のさらなる明確化・具体化**	１．学生スタッフ・コーディネーターの育成 ２．インターンシッププログラムの充実 ３．一般学生に対するボランティアセンターの周知 ４．活動報告書の充実	１．学生スタッフ・コーディネーターの育成として、COVID-19 の影響で、２つの特別勉強会を実施（オンライン）。第１回目は「学生時代の今から始める国際協力」と題して大林孝典氏（陸前高田市役所職員・元独立行政法人職員）に登壇頂き、学生時代のボランティア活動、JICA 職員の職務やなぜ市役所職員に転職したか、オンラインで実施した。第２回目は、「外交官の配偶者としてガーナ、チリ等の任国で取り組んだボラティア活動について」と題して元駐日ガーナ日本国大使夫人恭子氏にご登壇して頂いた。また、学生スタッフ研修旅行では、杉原千畝氏の人道支援について学ぶため、外務省の招聘でリトアニアに派遣された松下宗柏氏（静岡県長興寺住職・元 JETRO 職員）によるリトアニアの文化、人道支援について現地報告があり、また岐阜県と中継で、合掌作りのバーチャルツアーにてご報告頂いた。また、同研修旅行では、ワークショップにて手作りマスクを制作し、学生スタッフ有事の際は自分たちで身を守ることの大切さを学び、また、長期的な COVID-19 禍における支援のあり方を検討した。２.インターンシッププログラムの充実は、新規に NPO 法人鎌倉ユネスコ協会、及び NPO 法人なら国際映画祭に派遣し、充実した。３.一般学生に対するボランティアセンターの周知は、公式ブログの定期的な更新、学生スタッフによる広報用動画の制作、SNS の発信により戦略的に周知した。４．活動報告書の充実は、COVID-19 禍ではあるが、柔軟にオンラインボランティア派遣に転換し、学生のボランティア活動も充実したため、報告書の内容も活動内容に比例して充実した。
キリスト教精神／For Others の実践 **「女性のエンパワメント」構想の実施と検証**	１．ジェンダー平等や女性の人権に関する意識の向上	１.ジェンダー平等や女性の人権に関する意識の向上については、新規で NPO 法人鎌倉ユネスコ協会による「SDGs みらい塾」に学生スタッフをオンラインボランティア派遣し、女性のエンパワーメントや意思決定を担う女性の人材作りに関する阻害要因等に関して参加者（本学学生・一般）に対して講演を実施。

学生支援・キャリア形成支援の充実に向けた取組 **正課外活動支援**	1．地域連携事業の実施 2．被災地支援活動の新規開拓 3．他大学のボランティアセンターとのネットワーク拡充 4．学生によるボランティア活動の広報ツール作成 5．サービスラーニングに関する調査・研究	COVID-19 の影響で、1．地域連携事業の実施は、対面でのボランティア活動が中止となったため、オンラインに転換して NPO 法人だんだんの樹が運営する子ども食堂での学習支援、緑園東小学校での放課後学習支援を実施。また、新規に泉区社会福祉協議会からの依頼で、オンラインにて踊り場ケアプラザが運営する学習環境が整っていない中・高校生に対する学習支援を実施。2．被災地支援活動の新規開拓として、国際シンポジウムを主催し、RCE（Regional Center on ESD:ESD 推進の地域拠点）の拠点である国連大学のプログラム代表やインドネシアの減災研究者らに登壇頂き、被災地支援をとおした活動の発展性を模索した。3．他大学のボランティアセンターとのネットワークの拡充としては、横浜市立大学のボランティア（以下 VC）推進室と共催で学生スタッフ同士の交流会をオンラインで開催し、COVID-19 禍のボランティアセンターの現状と課題ついて報告した。4．学生によるボランティア活動の広報ツールについては、広報・動画制作チームの活動を強化し、広報用の動画を制作した。5．サービスラーニングに関する調査・研究については、 SDGs 及び ESD に関するプロジェクトの拡充への移行を図るため、サービスラーニングの観点からこれらの取り組みについて調査した。

2．2020 年度の活動をふりかえって

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、緑園東小ふれあい学習サポート、認定 NPO 法人だんだんの樹主催「子ども食堂」に参加している小中学生の学習支援など、これまで対面で実施していたボランティアをオンライン（Zoom）で実施。

今年度は、踊り場地域ケアプラザ（横浜市泉区）で中学生のオンライン学習支援、NPO 法人鎌倉ユネスコ協会（鎌倉市）との共同企画「SDGs みらい塾 Online Workshop」を実施。NPO 法人なら国際映画祭での現地ニュースレターの翻訳等もオンラインで行った。

12 月 14 日に「杉原千畝生誕 120 年記念講演・杉原千畝とリトアニア」をテーマに、駐日リトアニア共和国特命全権大使　ゲディミナス・バルブオリス氏が講演。本講演会は、国際交流学部のベンヤミン・ミドルトン教授の授業と連携した。

1 月 25 日に「日本と減災教育―ESD・SDGs の取り組みからみた減災の街づくりと海外とのパートナーシップ」をテーマに、国際シンポジウムを開催。松浦晃一郎大使（第 8 代ユネスコ事務局長）を特別ゲストにお招きした。国際交流学部のベンヤミン・ミドルトン教授の授業と連携。

学生スタッフの活動は、1、2 年生が中心となり、オンラインでの勉強会や研修会、他大学ボラセンとの交流会も企画・参加。ボランティアセンターの広報動画を製作。また、情報発信のための工夫として始めた Facebook や Instagram のサイトを継続的に活用してくれた。

（1） センター実施業務

①一般学生へのボランティア活動に関する情報提供

a.情報提供：大きく分けて、「ボランティアセンター学生スタッフの活動」「ボランティアセンターのプロジェクト」「関係団体等からのボランティア情報」の 3 種類の情報を提供している。方法としては、学内掲示、センター内資料（活動分野別団体ファイル、関連図書、各種ボランティア活動情報のチラシ等）、HP、SNS（情報提供者 ML に登録希望をした学生への定期的な情報提供等）などを通じて閲覧できる。（コロナ禍のため、予約制）

b.説明会・相談会：以下の説明会を開催した。（単位：名）

	参加者数
ボランティアセンター・オンライン新歓（6 月）	12
緑園東小学校放課後ふれあい学習サポート・上白根中学校アシスタントティーチャー説明会	中止
国際機関実務体験プログラム説明会（春・秋）	中止
海外ボランティア説明会（CIEE）	中止
ボランティア活動科目履修相談会	中止

②ボランティア活動の相談業務

a. 相談業務：例年、コーディネーター、職員および学生スタッフが、来訪者の相談に応じている。開室時間　月～金　10 時～17 時。2020 年度は学生からの問い合わせに対し、コーディネーターがメールで対応した。

b. ボランティア活動科目履修の相談業務

今年度の履修登録者数は次の通り。（単位：名）

		前期	後期	活動内容
ボランティア活動２（90 時間）	音楽芸術学科 3 年	1		国際連合食糧農業機関（FAO）

c. 学生スタッフ・コーディネーターの活動支援と研修

今年度は、学生スタッフ 3 名、学生コーディネーター（2 年目以上）27 名、合計 30 名が活動した。

③ボランティア活動保険登録手続きの代行

手続き取扱い者数　なし（コロナ禍のため、オンラインボランティアのみ実施）。

④学内組織・ボランティア系団体との連携

今年度は実施なし。

⑤学外組織との連携

a. NPO インターンシップ系ボランティア（2009 年度開始事業）

NPO 法人アクションポート横浜との連携によるインターンシップ系ボランティアへの学

生の派遣は、2020 年度は見送り。

b. 国際機関実務体験プログラム（2005 年度開始事業）
公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）を通じて実施。横浜市内 6 大学（フェリス、明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、國學院大学、神奈川大学）が参加しており、国際機関・国連機関での実務体験活動に学生を派遣。2020 年度の派遣は中止。

c. 横浜市立大学ボランティア支援室の学生スタッフとの交流
大学の活動を知り、お互いの問題点・解決策について話し合い、オンラインで交流した。

d. 泉区社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会
運営委員として参加。

e. 泉区社会福祉協議会主催による、障がい者との「ふれあい軽スポーツ大会」
2020 年度は中止。

f. 演奏ボランティア
2020 年度は派遣なし。

g.横浜マラソン
2020 年度は中止。

⑥学外団体への寄付・募金
・寿地区センター（タオル等の日用品を寄付）
・世界の子どもにワクチンを日本委員会（「NPO 法人ともにあゆむ」を介して、ペットボトルキャップ回収の収益を寄付）
・学校法人アジア学院（国内外の使用済切手、未使用切手、書き損じハガキを収集し寄付）

（2）学生スタッフ・コーディネーターの活動
①諸団体・組織からのボランティア募集情報やイベント情報などのチラシ、ニュースレター等の整理と掲示
②センターへの学生からの相談対応
③定例ミーティングの開催（アジェンダ作り、司会、議事録作成等を担当）
④外部団体や学内活動との連携
⑤ニュースレターの定期発行（今年度は 10 月、1 月に発行）
⑥研修会・勉強会　年 3 回実施（今年度は 6 月、8 月、3 月の 3 回実施）
⑦大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナーへの参加(ユースビジョン主催。2020 年度はなし)

（3）プロジェクト

例年以下プロジェクトを実施しているが、2020 年度は新型コロナウイルス感染防止のため、①②は実施なし。③⑦はオンラインで実施。①～⑦は継続事業（事業開始年順）。

① 第 18 回緑園新春コンサート（2003 年度開始事業）

認定 NPO 法人だんだんの樹（泉区・高齢者支援）との共催、泉区社会福祉協議会の後援として開催。学内では宗教センターの協力を得て実施。地域との連携事業となっている。主に学生スタッフの 1 年生が中心となって、プロジェクトの企画・運営をしている。2020 年度は中止。

② アンネのバラプロジェクト（Peace from Anne）（2003 年度開始事業）（7 頁）

平和に関するプロジェクトとして、園芸ボランティアや記念礼拝があり、後者は宗教センターと連携して実施している。2020 年度は実施なし。

③ 緑園東小学校放課後ふれあい学習サポート（2004 年度開始事業）（10 頁）

地域の小学校との連携事業として、毎週木曜日（14 時～16 時）に緑園東小学校図書室にて実施している。参加登録学生は 4 名。学習支援は、緑園東小学校の他、上白根中学校でのアシスタントティーチャーがある。2020 年度はオンライン（Zoom）で実施。また、地域の学習支援 NPO からボランティア募集が来ており、学校教育現場からの支援ニーズの高まりを感じている。

④ 使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付（2008 年度開始事業）（16 頁）

学校法人アジア学院へ寄付した。

⑤ ペットボトルキャップの収集（2008 年度開始事業）（16 頁）

キャンパスにてペットボトルキャップを回収し、泉区の NPO 法人「ともにあゆむ」を介して、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」からワクチンが提供される。

⑥ 寿町への支援（15 頁）

今年度は、タオル等の日用品をバザーへ寄付した。

⑦ 農業プロジェクト（2019 年度開始事業）（11 頁）

例年、学内にてプランターを使用して野菜を栽培し、収穫した野菜を泉区内の認定 NPO 法人「だんだんの樹」が運営する「子ども食堂」への食材として提供する。2020 年度は食材提供のみとし、子ども食堂に参加する小中学生への学習支援は、オンラインで実施した。参加登録学生は 4 名。

Ⅱ　2020 年度活動報告

学生主体の企画と連携

アンネのバラ

今年もフェリス女学院大学の緑園キャンパスにアンネのバラが満開となった。アンネのバラは、本間慎元学長を通して黒川万千代氏（当時、ホロコースト教育資料センター副理事長・故）のご協力を頂き、バラ育苗家の山室建治氏より寄贈を受けて、2003 年 11 月 17 日、植樹された。この年、廣石望初代ボランティアセンター長を中心に「アンネのバラ育成プロジェクト」が発足し、以来、学生たちの精力的なボランティア活動に支えられ、アンネのバラが育成されている。

「アンネのバラ」は、蕾の時は赤、開花すると黄金色になり、時間の経過とともにサーモンピンクに変色し、やがて更に濃いピンクに変色するという具合に、色が変わっていく。さまざまに色を変えるバラを「アンネのバラ」として選んだことには意味がある。

アンネは豊かな才能を秘めたまま戦争と民族差別のために、若くして命を奪われた。そんな彼女が生きていたなら、その才能を活かし、人生において幾つもの美しい花を咲かせたに違いない。多彩に変容する「アンネのバラ」には、多くの可能性を秘めたアンネを表現し、平和を祈るという、このバラを作出したベルギー人園芸家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏の願いが込められている。

1971 年、大槻道子という日本人がオットー・フランク氏と奇跡的に出会い、翌年のクリスマスにフランク氏からバラを分けて頂いた。その後、山室隆一氏にバラの増殖が託され、隆一氏が亡くなられた後はご子息建治氏がその栽培を受け継ぎ、アンネのバラは「戦争のない、平和な世界に」というアンネの願いとともに、日本全国に広まっている。

【授業連携】世界人権デー2020 講演会
「杉原千畝生誕 120 年記念講演・杉原千畝とリトアニア」

目的：世界人権デー特別記念、杉原千畝生誕 120 年記念として、講演会を開催。講演会をとおして、命の尊さ、民族や国境を越えた人権問題について問題提議する。

概要：今年度（2020 年度）は、杉原千畝生誕 120 年記念、ユダヤ人に対する「命のビザ発給 80 年」にあたる。国内外で、日本とリトアニアの国際交流や杉原千畝氏の活躍について、講演を実施している在京リトアニア大使に、命の尊さ、基本的人権の権利についてお話して頂く。また、学生による質疑応答を設け、学生がリトアニアの文化を触れ、多文化の豊かさについて交流の機会とする。

日時：2020 年 12 月 14 日（月）3 限（13 時 10 分～14 時 40 分）

講演者：駐日リトアニア共和国特命全権大使　ゲディミナス・バルブオリス氏
(H.E. Gediminas Varvuolis, Ambassador of　The Republic of Lithuania)

授業連携：「社会学概論 B」（ベンヤミン・ミドルトン国際交流学部教授）

****

フェリス・ブログの掲載記事（2021 年 4 月 13 日）～引用掲載～

世界人権デー特別記念講演会「杉原千畝とリトアニア」を開催
（執筆：ボランティアセンター）

2020 年 12 月 14 日、ボランティアセンターは、世界人権デー特別記念講演会「杉原千畝とリトアニア」を開催しました。

講演会では、駐日リトアニア大使ゲディミナス・バルブオリス氏が登壇し、1.リトアニアにおける日本人外交官杉原千畝氏による人道支援（2020 年は杉原千畝生誕 120 年記念年、ユダヤ人に対する「命のビザ発給 80 周年」にあたった）、2.リトアニアの文化・経済紹介、3.リトアニアにおける意思決定を担う女性、の 3 点についてお話されました。

1 について、1922 年に日本とリトアニアが協定を結び、1939 年には日本の最初の外交施設（領事館）がカウナスで開館されましたが、1945 年のソ連の占領により、在リトアニア領事館は閉鎖されました。リトアニアの独立後、1991 年に日本との外交関係が復興されました。杉原千畝氏は、リトアニアにおける最初の外交官となり、ソビエト連邦の占領に

より、リトアニア赴任は一年間のみでしたが、（人道的に）国際的な活躍を果たすことになりました。杉原千畝氏は、亡命を望むユダヤ人に対して「命のビザ」を発行し、6 千以上のユダヤ人の命を助けたためです。ユダヤ人難民の移動として、当時のリトアニアの首都であるカウナスからモスクワまで移動され、その後、シベリア横断鉄道を利用されてハバロフスクから敦賀に移動されました。ユダヤ人が初めて日本の土を踏んだ際、漸く安全な場所に到着したと感じられたとのことです。神戸から横浜、アメリカ、カナダ、オーストラリアに渡るユダヤ人も多く、中国の上海にも渡った方々もおられ、一部の国では、杉原千畝氏により命が救われたユダヤ人が記念碑等を設立されています。

（出所）杉原千畝記念館　http://www.sugihara-museum.jp/about/

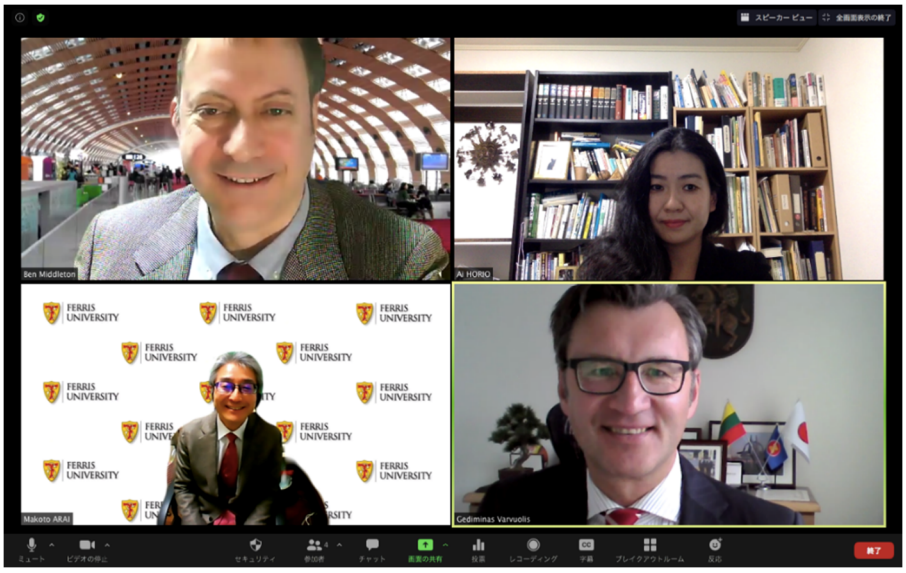
北欧では、女性の社会進出が早くから取り組まれています。

2 について、リトアニアの伝統舞踊や琥珀（こはく）といった天然鉱物や輸出用のエスカルゴ等といった豊かな食文化について魅力溢れる文化についてご紹介されました。

3 について、リトアニアの主要な 3 つの党首は全て女性であり、首相の Ms. Ingrida Šimonytė, Ms. Viktorija Čmilytė-Nielsen, Ms. Aušrinė Armonaitė らをご紹介されました。リトアニアの議員の内、半分が女性の議員となっており、最もジェンダーバランスが考慮されています。

大使から本学の学生に対して、「学生時代に懸命に勉強し、明るい未来を構築する意思決定を担う女性になって欲しい。また、日本社会が国際社会に開かれた社会にして頂きたい」という言葉でこの講演会を結ばれました。

当センターでは、世界人権デーに関する講演会をとおして、学生が国内外に人権の尊さ、平和構築の重要性について学べる機会となるよう、努めてまいります。



【写真】駐日リトアニア大使ゲディミナス・バルブオリス氏（写真右下）、荒井真本学学長（左下）ベンヤミン・ミドルトンセンター長（左上）、堀尾藍コーディネーター（右上）

緑園東小学校　ふれあい学習サポート

「緑園東小ふれあい学習サポート」は、緑園東小学校からの依頼を受け、2004 年度から学生たちが継続して取り組んでいるボランティアである。毎週木曜に、放課後の小学校の図書室で、子どもたちの学習サポートを行うチューターとして活動している。

また市内の上白根中学校ではＡＴ（アシスタント・ティーチャー）として学習支援を行う大学生の受入れを行っており、フェリス生もＡＴとして活動している。

センターに初回来室するフェリス生に実施しているアンケートでも、子どもの教育に関するボランティアは、関心の高い活動分野である。毎年、あふれる熱意を持った学生たちが、子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら、地域の学習支援ボランティアの現場で活動を実施している。

活動日時：毎週木曜日 14:00～16:00
活動場所：緑園東小学校　図書室
活動内容：チューターは、子どもたちが持参した学校の宿題や習い事の課題をサポートし、学習支援や居場所作りを提供。
例）国語の漢字練習、算数の計算問題　等

今年度は新型コロナウイルス感染予防のため、9 月 24 日（木）よりオンライン（Zoom）での活動を開始。
ボランティア登録学生：国際交流学科 3 年 1 名、国際交流学科 2 年 1 名、
日本語日本文学科 2 年 1 名、英語英米文学科 1 年 1 名（計 4 名）

踊り場地域ケアプラザ（横浜市泉区）学習支援「デニスホップ」

活動日時：毎週火曜・木曜　17:00～19:30
活動場所：踊り場地域ケアプラザ／方法：Zoom
活動内容：自宅での勉強が難しい中学生の学習支援
学習支援の内容：学校の課題（宿題）
ボランティア登録学生：日本語日本文学科 2 年 1 名、国際交流学科 2 年 1 名（計 2 名）

農業プロジェクト・子ども食堂

学内にてプランターを使用して野菜を栽培し、環境及び食糧問題に関する実践を積むことを目的とし、収穫した野菜を泉区内の NPO 法人が運営する「子ども食堂」への食材として提供している。今年は新型コロナウイルス感染防止のため、調理のボランティアは見合わせている。

7 月 3 日（金）じゃがいも 30 個収穫、7 月 6 日（月）子ども食堂へ送付

学習支援ボランティア（子ども食堂）

NPO 法人だんだんの樹が運営する「コミュニティだんだん」が地域の居場所づくりで提供している「子ども食堂」で、2019 年度より学生スタッフが子どもたちの学習支援ボランティアを行っているが、今年度は新型コロナウイルス感染予防のため、オンライン（Zoom）で活動を実施。

実施日：毎週水曜日　16 時～19 時
ボランティア登録学生：国際交流学科 3 年 2 名、国際交流学科 2 年 2 名（計 4 名）

つながる食支援

泉区社会福祉協議会では、新型コロナウイルス感染症の影響によりアルバイトが出来ないなど「食」に困っている学生に向け、食支援を行う活動を紹介。

開催日：第 1 回　7 月 11 日（土）13 時～17 時
　　第 2 回　8 月 31 日（月）9 時～17 時
開催場所：泉ふれあいホーム
主催：泉区社会福祉協議会
配分予定物品：米、麺類、レトルト食品、缶詰、お菓子など
対象：泉区在住、または在学（大学生）、一人暮らし（寮生可）

タウンニュース（泉区版）掲載号：2020 年 7 月 30 日号　～引用掲載～

コミュニティだんだん リモートで学習支援　（大学生が自宅から参加）

弥生台で地域の居場所づくりを提供している「コミュニティだんだん」（運営・ＮＰＯ法人だんだんの樹）で、ウェブ会議システム「Ｚｏｏｍ」を活用し、地元の大学生が自宅からリモートで子どもたちの学習支援ボランティアを行う動きが始まった。

リモート学習支援が行われているのは、同所で毎週水曜日の午後４時から開かれている小中学生向けの学習応援・子ども食堂。フェリス女学院大学（緑園）の学生がリモートで参加している。

「だんだん」では地域の高齢者のほかに、以前から同大学や看護学校の学生たちがボランティアで参加。子どもたちと近所の公園で一緒に遊んだり勉強を教えたりしていた。しかし新型コロナウイルス感染症の影響から大学が休校・オンライン講義を行う中で、学生ボランティアが活動に参加できない状況が続いていた。そこで同大学のボランティアセンターからオンラインでの活動の提案があり、今回の実施に至った。

７月 22 日の初日は、大学生３人が自宅から参加。絵本の読み聞かせや、子どもたちからの質問などに画面を通じて答えた。岡津小６年の女子児童は「楽しかった。また一緒に遊びたくなった」と笑顔で答えた。

今回半年ぶりにリモートで子どもたちに再会した国際交流学部３年の櫻井ひなよさんは「対面のほうがコミュニケーションを取りやすいが、以前話をした子の髪型が変わっていたり、リモートでも子どもたちの変化を感じることができた」と話す。

初めて子どもたちと交流した同学部２年の澤岻和乃さんは「オンラインでもコミュニケーションを取れてボランティアのイメージが理解できた。今後は画面共有機能などを活用したい」と感想を述べた。

フェリス女学院大学では前期授業のリモート実施に伴い、一定時間以上のオンラインでのボランティア活動を単位に認定。学生の参加の一助となっている。

接続に苦戦しながらも初のオンラインを終えた「だんだん」の丹羽喜代子マネージャーは「大学生は子どもたちにとっての身近なモデル」と交流再開を歓迎していた。

画面越しに絵本の読み聞かせを行う大学生

外国籍住民学習支援と出会い　@多文化まちづくり工房

泉区「いちょう団地」には、ベトナム、カンボジア、ラオス、中国等、様々な国から来日された方々が居住している。「多文化まちづくり工房」（代表：早川秀樹氏）は、いちょう小学校コミュニティハウスでの日本語学習教室の開催、外国籍の子ども達を対象にした学習サポートの実施、外国籍住民の住宅入居相談（県へ協力）、外国籍住民が参加する多文化に対応する地域防災（泉区消防署と合同）など幅広い活動を実施している。その活動は、2009年 11 月「第 40 回博報賞」（財団法人　博報児童教育振興会）国際文化理解教育部門、2011年 1 月「国際交流基金地球市民賞」（独立行政法人　国際交流基金）にも選出されるなど、評価されている。

本学は、泉区に位置しており、同区にある「多文化まちづくり工房」へボランティア派遣を実施している。そのボランティアは、日本語教師を目指す学生のみではなく、国際協力に関心を持つ学生も参加する。また、ボランティア活動に参加したことにより、日本語教育の勉強を開始する学生もいる。当センターの設立当初から、本学生に対する地域からのボランティア活動の期待が大きい。

多文化を背景とする子どもに対する学習支援は、日本人の学生にとっても国際文化交流や多文化理解教育としても位置付けられる。また、地域の課題の一つとして、外国人に対する防災教育がある。

外国につながる子どものための学習支援　@ABC フリースクール

NPO 法人 ABC ジャパンは、神奈川県の外国人のコミュニティの支援を目的として設立され、外国人対象の日本語教室など多文化共生の推進に重点を置いている。外国につながる子どもを対象としたフリースクール「ABC フリースクール」（鶴見区）において、生徒たちの勉強のサポートをするボランティアを募集しており、外国につながる子どもの教育や学習支援に関心のあるフェリス生が活動に参加している。

NPO インターンシップ系ボランティア
@NPO 法人横浜 NGO ネットワーク（国際協力オンラインボランティア）

国内外の課題解決に取り組む NGO･NPO でのインターンシップ系ボランティアとして、NPO 法人横浜 NGO ネットワークをボランティアセンターで紹介している。

＜団体紹介＞
国際協力活動の推進のため､横浜及び神奈川県内の　NGO の連携のために 2001 年に設立。国際ボランティア講座、ネットワーク NGO 全国会議、かながわ国際協力フォーラム等の事務局を担当。NGO 相談員。

＜ボランティア内容＞
国際協力・多文化共生イベント（オンライン）の企画・運営。
活動時間・曜日：要相談／活動場所：Zoom
求める人材：ボランティアに関心がある学生、横浜の課題解決に関心がある学長期的にボランティア活動への参加が可能な学生、横浜が大好きな学生

寿町炊き出し・夜回り・バザー

寿町は、関内と石川町の間にある簡易宿泊所街である。ここには、失職し、居住地を失った約 6000 人の人々が居住しており、その内の 9 割以上が男性高齢者である。1 泊 2000 円の簡易宿泊所の小部屋に泊まるか、その費用のない人は、外にダンボールなどを敷いて夜を過ごしている。かつては外国からの移住労働者も多くいたが、不況の影響や、日本の出入国管理法による規制強化により、現在はその数が少なくなった。ここには、高齢者の集う「木楽な家」や、種々の障がい者福祉作業所があり、様々なボランティア活動が実施されている。

「寿地区センター」では、炊き出し、バザー、夜回りパトロール活動のほか、学生の啓発と研修のための「寿わーく」が開催されている。「寿わーく」には、学生以外も参加しており、他者と接することで視野を広げることができる。また実際に路上生活者の方々と接することで、現代社会の課題を考える貴重な機会となっている。

【寿町バザー】

ボランティアセンターでは、未使用のタオル、石鹸、使い捨てカミソリを集め、日本キリスト教団寿地区センターに送り、寿町バザーに協力している。

学生スタッフが作った収集箱は、センター内のカウンターに置かれ、随時、生活用品を募集している。

【寿町炊き出し】

炊き出しに参加することで、実際に簡易宿泊所で生活されている方の話を拝聴したり、交流をはかることができる。炊き出しは毎週金曜日に行われている。

今年度は新型コロナウイルス感染予防のため、学生の参加は見合わせたが、コーディネーターが 10 月 30 日に炊き出しに参加。また、横浜市寿町健康福祉交流センター2 階のことぶき協働スペースを訪問し、来年度以降の学生派遣の下見を行う。

寿地区センターの場所

使用済み切手・書き損じハガキ収集

ボランティアセンターでは使用済切手、書き損じハガキなどを収集しており、本年度は、学校法人アジア学院へ寄付した。

例年は切手の仕分けは学生スタッフが行っており、使用済切手・書き損じハガキなどを送るこの活動は「身近にできる国際ボランティア」となっている。また、継続的な取り組みが社会への貢献につながる。宗教センター、山手事務室、教務課ほか学内の皆さまから収集のご協力を頂き、感謝申し上げたい。

使用済切手仕分け作業（2019 年度活動写真）

ペットボトルキャップ収集

回収したペットボトルキャップは、搬入先である「NPO 法人ともにあゆむ」を通じて、JCV（認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを日本委員会） に寄付している。

集計日	回収数	ポリオワクチン	回収重量	CO2 削減量
2010 年度	45,600 個	57.00 人分	114.0kg	359.10kg
2011 年度	60,480 個	75.60 人分	151.2kg	476.28kg
2012 年度	80,539 個	97.30 人分	194.5kg	612.68kg
2013 年度	43,344 個	50.40 人分	100.8kg	317.52kg
2014 年度	58,093 個	67.50 人分	135.1kg	425.57kg
2015 年度	39,904 個	46.40 人分	92.8kg	292.32kg
2016 年度	41,495 個	48.25 人分	96.5kg	303.98kg
2017 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.64kg
2018 年度	37,152 個	43.20 人分	86.4kg	272.16kg
2019 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.65kg
2020 年度	24,854 個	28.90 人分	57.8kg	182.07kg
累計	505,077 個	600.15 人分	1,200.3g	3,780.97kg

＊2kg（860 個）でポリオワクチン 1 人分が購入できる。
（ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より 1kg=400 個より 430 個に変更された）

センターでは、通常設置している回収 BOX 以外に、大学祭で回収 BOX を特別に設置するなど、収集に努めている。日頃からこうした活動にご理解下さり、感謝申し上げたい。

なら国際映画祭 2020 ボランティア

日時：2020 年 9 月 18 日（金）～9 月 22 日（火）

主宰者：「なら国際映画祭」エグゼクティブディレクター　河瀬直美氏（映画監督）
・カンヌ映画祭（2007 年）グランプリ受賞
・東京オリンピック公式
・大阪万博（2025 年）プロデューサー

なら国際映画祭とは？
奈良の平成遷都 1300 年目となる 2010 年、映画作家の河瀬直美をエグゼクティブディレクターに迎え始まった「なら国際映画祭」。2 年に 1 回開催される映画祭で、10 年目となる今年のテーマは「トレジャーハント、宝物はなんでしょう？」。奈良には、歴史・自然・神仏・生き物、たくさんの宝物がある。

ボランティア参加学生：音楽芸術学科 3 年 1 名、国際交流学部 2 年 2 名（計 3 名）

＜学生ボランティアの内容＞
・デイリーニュース制作スタッフ
　映画祭期間中に毎日発行される公式デイリーニュースの取材、撮影、記録撮影、編集。英語のできる方、編集経験のある方、対象。
・アテンドスタッフ
　審査員、監督、ゲストなど、滞在中のサポートやインフォメーションなど、国内外からのゲストの対応。

今回は新型コロナウイルス感染対策のため、オンラインでボランティア活動を実施。ゲストの来日が少ない場合、アテンドスタッフが待機することもあった。

SDGs みらい塾　オンラインワークショップ

当センターの国際プロジェクトチームの派遣先の一つとして、鎌倉ユネスコ協会がある。毎週、学生達は、国際協力に関する課題解決に取り組んでおり、SDG s みらい塾の企画・運営に携わっている。

NPO 法人鎌倉ユネスコ協会 x フェリス女学院大学ボランティアセンター共同企画

第 1 回　2020 年 11 月 29 日（日）13 時～14 時半
「COVID―19 で明るみに出た日本の格差問題」国際交流学科 2 年
参加者：21 名（内、フェリス生 3 名）

第 2 回　2020 年 12 月 20 日（日）13 時～14 時半
「女性に対する偏見」国際交流学科 2 年
参加者：20 名（内、フェリス生 3 名）

第 3 回　2021 年 1 月 31 日（日）13 時～14 時半
「ザンビアにおける基礎教育に対するコミュニティスクールの役割
―コミュニティーによるまちづくりへの参画―」
ボランティアセンターコーディネーター　堀尾藍
参加者：21 名

第 4 回　2021 年 2 月 21 日（日）13 時～14 時半
「コロナと SDGs」
講師：石田喬也（特定非営利活動法人鎌倉ユネスコ協会 副会長）
参加者：11 名

第 1 回　2020 年 11 月 29 日（日）「COVID―19 で明るみに出た日本の格差問題」

【参加者アンケートより】

●第 1 回　2020 年 11 月 29 日（日）「COVID―19 で明るみに出た日本の格差問題」

・SDGs については、昨年から動きが感じられましたが、今年になって、ようやくあちこちでイベントが開かれる状態ですね。こうした中で、フェリス生の皆さんが挑戦してくれて、良かったと感じています。

・格差についての概要をデータとともに知ることができたことです。

・普段関わりのない世代方と意見交換ができたことがとても勉強になりました。

●第 2 回　2020 年 12 月 20 日（日）「女性に対する偏見」

・ジェンダーの考え方について、「女性」という集合体で捉え、数値的なことに焦点に当てることの難しさを感じました。ジェンダー格差が少ない国ははぜ状況が良いのか、逆にそれに伴うデメリットは何か、日本でもそれは適用できないのか、など、日本以外の状況も確認したら良いと思います。また、女性の中でも女性としての考え方が分かれる点（「女性らしさ」として捉えるその「像」はそれぞれ違うのでは？）や、LGBTQ の観点からも「女性」という単語でひとくくりにすることの難しさも感じました。

・ジェンダーに関連するデータを改めて確認できました。

・一か所に参加者全員が集合しなくても幅広い学びの有意義な会が開催できる点が大変良かったと思います。

●第 3 回　2021 年 1 月 31 日（日）「ザンビアにおける基礎教育に対するコミュニティスクールの役割―コミュニティーによるまちづくりへの参画―」

・鎌倉ユネスコ協会で、私は識字と書き損じハガキを担当していて、書き損じでは今年度も多く集まりコロナ禍の中、変わりなく支援できることがうれしいです。お話の最後に小済みの切手を集めているとのお話がありましたが､今まで送り先を検討しておりましたが、今後はフェリスのボランティアセンターにお送りできると有り難いです。

・現場の写真を多く見せていただいて臨場感があったのが良かったです。

・グループセッションの際に、参加者それぞれの視点で意見交換できて、大変勉強になりました。

【公開授業】国際シンポジウム　日本と減災教育—ESD・SDGs の取り組みからみた減災の街づくりと海外とのパートナーシップ

日時：2021 年 1 月 25 日（月）3 限・4 限／開催：オンライン（Zoom）

特別ゲスト：松浦晃一郎大使（第 8 代ユネスコ事務局長）（ビデオレター）

パネリスト：戸羽太氏（岩手県陸前高田市長）
「陸前高田市の防災・減災教育とまちづくり」

春田博己氏（外務省国際協力局地球規模課題総括課 課長補佐）
「持続可能な開発目標（SDGs）と地球規模課題への取り組み」

竹本明生氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所［UNU-IAS］プログラムヘッド）
「国連大学における ESD に対する取組み」

Dr. Harkunti P.Rahayu, Bandung Institute of Technology
「日本とインドネシアの減災教育におけるパートナーシップ」

モデレーター：堀尾藍コーディネーター

報告者：ボランティアセンター学生スタッフ被災地支援プロジェクトチーム

授業連携：「社会学概論 B」（ベンヤミン・ミドルトン国際交流学部教授）

松浦晃一郎大使（第 8 代ユネスコ事務局長）によるビデオメッセージにより、開演

「防災は難しい。減災対策が重要である」と指摘された戸羽太氏（陸前高田市長）

【プログラム】

モデレーター：堀尾藍コーディネーター

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊第１部＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

13：10～13：15　ベンヤミン・ミドルトンセンター長挨拶

＜特別ゲスト（ビデオレター）＞

13：15～13：25　松浦　晃一郎　大使（第８代ユネスコ事務局長）

Mr. Koichiro Matsuura, The 8th Director-General of UNESCO

＜パネリスト講演＞

13：25～13：45　戸羽太氏（陸前高田市長）

「陸前高田市の防災・減災教育とまちづくり」

Mr. Futoshi Towa, Mayor of Rikuzentakata city,

13：45 ～14：05　春田博己氏（外務省国際協力局地球規模課題総括課課長補佐）

「持続可能な開発目標(SDGs)と地球規模課題への取り組み」

Mr. Hiroki Haruta, Deputy Director, Global Issues Cooperation Division, Ministry of Foreign Affairs of Japan

14：05～14：25　竹本明生氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-IAS）プログラムヘッド）

「国連大学における ESD に対する取組み」

Mr. Akio Takemoto, Programme Head at United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 第２部＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

14：50～15：15　Dr. Harkunti P. Rahayu, Bandung Institute of Technology

「日本とインドネシアの減災教育におけるパートナーシップ」

15：15～15：40　パネルディスカッション

Panel discussion

15：40～15：50　フェリス女学院大学ボランティアセンター被災地支援プロジェクトチーム

15：50～16：20　質疑応答

QA; question and answer

【パネリスト紹介】

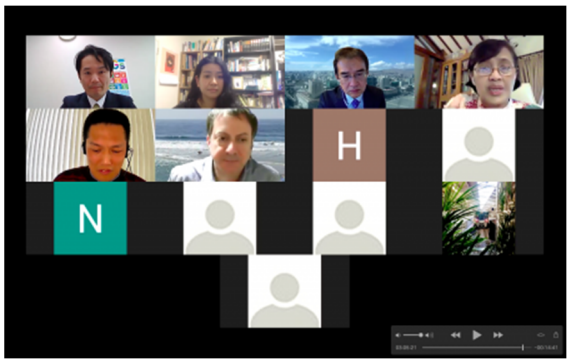
●松浦　晃一郎(まつうら　こういちろう)　大使　（ビデオレター）
第 8 代ユネスコ事務局長。外交官として、在フランス日本国大使（1994 年）等を歴任。学術博士号所得（2011 年）。主な著書に「アフリカ曙光」(2009 年）等がある。

●戸羽　太(とば　ふとし)　氏
岩手県陸前田高市長。
1965 年神奈川県松田町生まれ。東京都立町田高校卒。米の留学経験あり。
2011 年 2 月の市長選に初出馬、初当選を果たし、東北地方で一番若い市長として就任。
2011 年 3 月の東日本大震災では壊滅的な被害を受け、以降、復興に向けた新しいまちづくりを進める。

●春田　博己(はるた　ひろき) 氏
外務省地球規模課題総括課　課長補佐
オーストラリア国立大学大学院環境・開発学研究科修了
2004 年外務省入省。在イエメン日本国大使館、海外邦人安全課などで勤務。17 年より現職。

●竹本明生(たけもとあきお)　氏
国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-IAS）　プログラムヘッド
環境省、通商産業省、外務省などで気候変動政策等の環境政策を担当。地球環境ファシリティ（GEF）において開発途上国の環境対策を支援。2020 年 6 月から現職。

●Dr. Harkunti P. Rahayu,
Bandung Institute of Technology 所属。減災、津波に関する論文を執筆する。



登壇者（写真左から春田博己氏、右から Dr. Harkunti Rahayu, 竹本明生氏）及び
ベンヤミン・ミドルトンセンター長（中段左から２番目）、堀尾藍コーディネーター（左から２番目）

【参加者アンケートより】

Q1: 全体の運営はいかがでしたか？

途中参加しましたが、内容が詰まったシンポジウムになったと思います。

Q2：第一部はいかがでしたか？

外務省や国連大学の活動が大まかな理解できたのではないかと思います。

Q3：第二部はいかがでしたか？

インドネシアの津波防災事情に関して、どうしたら被災者を減らせるのかを考えさせられました。やはり自然災害はどうしても犠牲者が発生してしまうため、悲観的に捉えてしまうのは仕方ないですが、防げる生命を守ることがとても重要と思いました。

Q4:本シンポジウムで一番印象に残った登壇者の話は何ですか？

第二部に登壇されたインドネシアの大学の教授（Dr. Harkunti P. Rahayu）です。

Q5：Q4 について、どうして印象に残りましたか？

津波被害の軽減する方法と問題点が述べられていて、日本にも関わると思ったから。日本と同様に災害の多いインドネシアの取組事例がよく理解でき，パートナーシップで補完しあえる部分を確認できたから。

Q6：講座の改善点やお気づきの点がありましたら、ご記入下さい。

たくさん質問が寄せられていたため、十分な質疑応答時間があればいいなと思いました。教育の観点がもっとあっても良かった。そういう点では RCE のネットワークが行かせたら良かったと思います。

****

フェリス・ブログの掲載記事（2021 年 3 月 11 日）～引用掲載～

国際シンポジウム「日本と減災教育」を開催（執筆：ボランティアセンター）

2021 年 1 月 25 日（月）、ボランティアセンターが国際シンポジウム「日本と減災教育―ESD（Education for Sustainable Development:持続可能な開発のための教育）・SDGs の取り組みからみた減災の街づくりと海外とのパートナーシップ」を主催しました。

本シンポジウムの冒頭では松浦晃一郎まつうらこういちろう大使（第 8 代ユネスコ事務局長）から、ユネスコ事務局長としてのご経験をふまえた ESD 及び SDGs の観点から、減

災教育の取り組みや、日本が震災の経験をもとにESD及びSDGsの観点からも世界に発信する重要性を持つこと、また、当センターによる減災教育に関する本イニシアチブに関する激励がビデオメッセージとして述べられました。

戸羽太氏（岩手県陸前高田市長）からは、「防災・減災教育とまちづくり」を題とし、東日本大震災における陸前高田市の被災経験から現在どのように防災・減災教育に取り組まれているかの事例として、教育現場における地域住民及び小学校等での避難訓練や減災研修、防災マイスター養成講座のカリキュラムを紹介していただきました。また同大震災にて、岩手県立高田高校の実習船がアメリカのクレセントシティー（カリフォルニア州）に漂着したことを機に両市が姉妹都市になり、減災教育や文化交流において連携をなされていることも紹介されました。

春田博己氏（外務省　国際協力局地球規模課題総括課　課長補佐）からは、外務省によるSDGsに関する概要や地球規模課題への取り組みについて説明していただきました。また、ご自身が赴任されていたイエメンの教育の現状や課題について現場の写真とともに解説していただき、平和構築の実現のためには教育が重要であることを再確認することができました。

竹本明生氏（国連大学サステイナビリティ高等研究所　(UNU-IAS)　プログラムヘッド）からは、「国連大学のESDの取り組み」と題して、ESDの概要や国連大学がESDと認定したRCE（Regional Center on ESD:ESD推進の地域拠点）の拠点のご紹介、特にRCE兵庫―神戸やRCE北九州による大牟田等の豪雨被災地支援等についてお話ししていただき、地域に根付いた被災地支援の重要性についても提言されました。

また、海外からのゲストであるDr. Harkunti Rahayuからは、日本と同様、これまでに多くの地震による津波の被害が多く発生しているインドネシアの減災教育について紹介され、被災の経験を可視化し、後世に減災教育を伝えていく重要性について話されました。

本シンポジウムによって、長年津波の被害を受けて来た日本、アメリカ、インドネシアの3カ国による減災教育に関する現状や課題について共有し、お互いが連携することの重要性を再確認しました。

学生からは「日本以外の減災教育について学ぶ良い機会となった」「東日本大震災の経験を忘れず、次の世代にも伝えたい」と感想という感想が寄せられました。

これからも、当センターでは、継続的に減災教育について取り組み、インプットとアウトプットの両方を大切にし、経験を可視化し、減災教育を後世につなげていきます。

本シンポジウムでは、学生及び教職員、一般の方々、計80名がご出席されました。この場をお借りして、ご登壇して下さいましたパネリストの皆様、関係者の皆様、ご出席して下さった方々に厚く御礼を申し上げます。

第１回ボランティアセンター・オンライン勉強会
「学生時代の今から始める国際協力・ボランティア」

主に新 1 年生にとって、学生時代にどのようなボランティアに参加するか、学生時代の取り組み方についてイメージする為、オンラインで勉強会を開催。
【日程・場所】6 月 13 日（土）13 時～14 時半／オンライン開催（Zoom）
【登壇者】陸前高田市役所職員　大林孝典氏（元　独立行政法人国際協力機構（JICA）職員としてマラウイ、タンザニアに赴任）

【参加者】国際交流学科 2 年 3 名、国際交流学科 1 年 2 名、英語英米文学科 1 年 1 名、コミュニケーション学科 1 年 1 名、音楽芸術学科 1 年 1 名、他 1 名
計 10 名（学生 9 名、堀尾コーディネーター）

【スケジュール】
13 時～　講演
13 時半～　質疑・応答
14 時～　オンライン（登壇者との）懇親会

【講演：陸前高田市役所職員　大林孝典氏】
学生時代はアカペラグループに所属し、陸前高田で歌う機会がありました。学部生の頃は、陸前田高市にある中学校の音楽室で歌わせて頂きました。その時、陸前高田市の場所が凄く良い所だと感じました。それが僕と陸前高田市との最初の出会いです。その後、JICA に採用されました。入職後、半年間、海外で研修を受けました。発展途上国の首都には、JICA オフィスがあり、現場のプロジェクトを体験させてもらいました。
2011 年に東日本大震災が発生しましたが、当時僕は東京の本部勤務でした（2012 年からタンザニアに赴任が決定）。震災 2 ヶ月後、被災しなかったお宅で、アカペラを歌い、自衛隊の人たちが支援している段階でした。5 月には国内から支援物資が届き、支援物資を仕分けていました。ボランティアではありましたが、陸前高田市にいながら、支援を受ける立場を疑似体験し、その経験によりタンザニアでも、援助を受ける人の存在が大事だと実感しました。JICA で勤務すると、2、3 年のスパンで移動になります。次第に僕は「期間限定でしか、その国と関われない。当事者として地域を良くしたい」と考えるようになりました。
タンザニアでは上水路を作りましたが、現地では使用していませんでした。なぜなら湧き水が浄水路の近くにあり、皆そのきれいな湧き水を汲みに来ていました。上水路は、汚れを固めるための薬を入れ、メンテナンス用の人材育成も必要です。現地は、外から援助してもらえ、貰える物は貰う。しかし、この経験を通して、本当に必要なものは何か考え、本来は教育や医療のためのお金に使うべきだったと思います。

こうして失敗例が意外と多いことに気がつきました。大きな失敗の要因は何であったのでしょうか？JICA のプロジェクトは、終了してから 10 年後に評価をします。具体的には、C の評価が一番悪い評価で、このように原因分析をします。現地を理解して、本当に課題となっているのは何か、調査をする必要があります。客観的な視点がとても大事だと思います。

陸前高田市は岩手県にあり、宮城県との県境にあります。津波で被害を受けましたが、牡蠣やホタテ、ホヤの養殖が昔からあり、農業や林業では、林檎や柚子を育て、田んぼもあります。陸前高田市は、岩手県の中で最も大きな被害を受け、街が壊滅的となりました。江戸時代に潮風から防風林・防災林として、7 万本の松が植えられました。この松も津波で流され、陸前高田市では、東日本大震災にて、1760 名が亡くなりました。亡くなった人の遺体も沖に流され、現在もなお、200 名近くが行方不明となっており、4000 世帯が津波で流されました。実に 7.3%が亡くなり、半数以上が家を失ったことになります。この震災後、街全体は 10m から 20m 嵩上げしました。復興とは、市役所が流されたから市役所を作るのではなく、より良い街を作る、ソフトの取り組みが重要だと考えています。

それでは、より良い街を作るというとはどういうことでしょうか？震災以前からある課題にも取り組む必要があります。産業の衰退、少子高齢化を考える必要があります。どのようにリソースを立て、街を少しでも良くするか、が今の仕事です。市役所では、以前僕が担当し「VISIT 高田推進プロジェクト」を立ち上げました。過疎化で人数は少なくなりましたが、陸前高田市に足を運んでくださる方、外からお金を落としてくれる人が増えると、市が維持できます。満足度が増えるために、海外コンテンツを充実させるようになりました。また、通訳ガイドの育成にも努めています。陸前高田市では、外国出身の市民は 100 人います。市内では看板を多言語化し、ビジュアルで分かるように改善しています。

以前、お年寄りの見守りといったボランティアの需要がありましたが、復興が進み、今はありません。松林の再生も終わりかけ、仮設住宅も殆どありません。また、支援物資の配布等のボランティアありましたが、今はなくなってきています。

震災とは別に、地方が抱える課題はあります。若い人たち自身が、自分達自身で、「何を求められているか」と自分達で課題を考えることが重要だと思います。

【参加学生の感想】

ボランティアセンターの学生スタッフとして被災地支援プロジェクトメンバーとして活動しているのですが、震災復興として今、東北で求められていることはありますか？と質問したところ、東日本大震災直後は支援物資の仕分け、がれきの撤去、高齢者の傾聴ボランティア等がありましたが、仮設住宅も基本的にはない現在は、若い人を中心に陸前高田の町おこしをしている NPO 法人に参加したりして、地域が抱えている課題を現地の人と共感して欲しいとのことでした。今は新型コロナウイルスの影響でなかなか活動が出来ない状況ですが、自分たちなりの課題を見つけ、現地で同じ思いを持っている人と共感していけたら思います。（国際交流学科 2 年）

第１回ボランティアセンター学生スタッフ研修会

特別講演
「外交官の配偶者としてガーナ、チリ等の任国で取り組んだボランティア活動について」

【日程・場所】8 月 30 日（月）10 時～14 時／オンライン開催（Zoom）
【登壇者】二階恭子氏（元在ガーナ大使夫人）
外交官の配偶者としてガーナ、チリ等の任国にてボランティア活動を実施。現在は日本中近東アフリカ婦人会の活動に加え、アフリカの高校生の日本への交換留学のサポートなどの活動に取り組んでいる。

【参加者】国際交流学部 4 年 1 名、国際交流学科 3 年 1 名、国際交流学科 2 年 7 名
ベンヤミン・ミドルトンセンター長、堀尾藍コーディネーター（計 11 名）

【スケジュール】
10 時　特別ゲスト講師：二階恭子氏（元在ガーナ大使夫人）
特別講演「外交官の配偶者としてガーナ、チリ等の任国で取り組んだボランティア活動について」、質疑応答
11 時　学生スタッフからの各プロジェクト報告
（アンネバラ、農業・子ども食堂（だんだんの樹）、ふれあい学習、被災地支援、演奏ボランティア、日本語・多文化共生）
13 時　学生スタッフからの各プロジェクト報告（動画制作、寿町）
13 時半「カナダでの生活・カナダのボランティア事情について」
（国際交流学科 4 年、カナダからオンライン参加）
コメント・後期のイベント紹介：堀尾コーディネーター

【第１回ボランティアセンター学生スタッフ研修会　議事録（学生スタッフ作成）】
特別ゲスト講師：二階恭子氏（元在ガーナ大使夫人）
「外交官の配偶者としてガーナ、チリ等の任国で取り組んだボランティア活動について」
・外交官であった夫はブラジル・サウジアラビア・ガーナ・オーストラリア等に駐在され、二階氏はそれぞれの国で様々なボランティア活動をされた。今回はガーナとチリでの活動をメインにお話された。
・ボランティア活動で大切なことは二つである。相手のニーズは何か。相手の求めているものを提供する。今行っている活動・経験はいつか次に生かすことができる。だから、何事も打ち込んで取り組むべきである。

ボランティアセンター各プロジェクトチームの報告

アンネバラプロジェクト

・例年はバラを用いたポプリを作っている。但し今年の大学祭は中止になったため、検討中。

子ども食堂ボランティア（毎週水曜日 16 時～19 時、だんだんの樹）

・子どもの憩いの場として開設。子どもたちはまず宿題に取り組み、その後は外遊びやゲーム機で楽しんでいる。

・農業プロジェクトは、去年 5 月よりボランティアセンターで育てた野菜を「だんだんの樹」に子ども食堂の食材の一部として提供している活動。

・新型コロナウイルスの影響で子ども食堂は閉鎖状態であったが、7 月よりオンラインで活動開始。但し、クイズや世間話がメインとなっており、子どもたちとの距離は遠くなっているが、実際にオンラインで行われたクイズ大会をこの研修会内で実施。

ふれあい学習プロジェクト（毎週木曜日 14 時～16 時、緑園東小学校）

・現在活動休止状態であるが、近日中にオンラインでの再開を検討中。

・オンラインで、踊場地域ケアプラザにて中学生を対象にした「学習支援」を行う予定。

被災地支援プロジェクト

・従来の活動として、被災地ボランティアの活動費を学生 10 名まで補助し、3 月 11 日東日本大震災被災者の支援活動やシンポジウムを開催した。

・現在では、被災地の「地域再生・活性化」に力を入れ、後世に残す活動を行っている。また、緊急性の高い地域への支援を行っている。（2020 年 7 月豪雨で熊本・福岡・大分で深刻な被害を受けた。COVID-19 感染リスクが高いためボランティアをする人々が少なく、復旧に時間がかかる状況下、被災者の精神的ストレス・熱中症のリスクが高まっている。）

・今後は、フェリス内外で支援の呼びかけや、被災地の人々やボランティアしている人々と Zoom でつながるイベントを考えたい。COVID-19 が終息次第、現地への派遣を考えたい。

演奏ボランティア

・末期がん患者の緩和ケアのための演奏ボランティア、だんだんの樹と共催でのコンサート、クリスマス演奏会に関わってきたが、今後はオンラインでの実施を検討したい。

日本語教育・多文化共生

・後期は日本語教育ボランティア中心で行う。

・ABC フリースクール（オンラインボランティア）高校入試を控える外国人の子ども対象

・つるみーにょ（一人で宿題を取り組むのが難しい外国のルーツを持つ子どもたち対象）

動画制作

・新一年生向けの新歓ビデオの制作、Instagram アカウントの開設

・当初は動画編集ソフト LoiloScope で制作していたが、のちに Filmora に変更。

寿町プロジェクト

・SDGs ゴールの 2（飢餓をゼロに）と 11（住み続けられるまちづくりを）に関わる

・炊き出し（11 月～7 月、毎週金曜日実施）、バザー（毎月第一土曜日午前中に実施）

・夜のパトロール実施

「カナダでの生活・カナダのボランティア事情について」

国際交流学科 4 年　宮本雅子（カナダよりボランティア参加）

・5 月ごろからボランティア活動（カナダ人に日本語を教える活動）や、マラソンのボランティア、ビーチでゴミ拾いに携わった。カナダは新型コロナウイルス感染予防の意識が高く、ソーシャルディスタンスを守っている人がほとんどである。

【参加学生スタッフの感想】

1. 研修会で一番印象に残った発表は？

・被災地支援プロジェクト

→しっかり考えられていて、参加してみたくなるようなプロジェクトだったから

・子ども食堂プロジェクト（複数）

→写真等をみながら聞くことができ、実際の活動をイメージすることができた

・二階恭子氏（元在ガーナ大使夫人）のお話（複数）

2. プログラムの内容について、いかがでしたか？

・初めて研修会に参加したので、多くのことを知れて良かった。自分が所属するプロジェクト以外にも多くのことを取り組み、考えていることがあることが知って興味が沸くのと同時に、色々なボランティアに参加し、現状を知りたいという思いが強くなった。

・オンラインでの研修会は伝えるという点で難しいものがあると思った半面、自由に接続でき、その点が便利だと感じた。

・どのプログラムの発表も「皆さん元気に活動されているな」と思った。コロナ禍で大変な時期である中、オンラインでもボランティア活動が行われているところもあるので。

3. 二階恭子氏（元在ガーナ大使夫人）講演の感想

・貴重なお話を聞けて良かった。治安について話して下さったので、より前向きにアフリカ地域等のボランティアに興味をもつことができた。実際に様々な経験をされている方のお話を聞くのは刺激になると改めて感じ、今後も心に留めておきたいと思う。

・印象に残ったのは「ボランティア活動で大切なこと、相手のニーズは何かを考えて提供する。今行っている活動・経験はいつか次に生かすことができる。だから何事も打ち込んで取り組むべきである。」という言葉である。ただ相手に何でも与えるのではなく、相手の立場になって考えなければならないと、深く考えさせられた。

4. ボランティアセンターに意見はありましたら聞かせて下さい

・以前ボランティアセンターで支援をしていたパレスチナ地方の刺繍の活動をもう一度知りたいし、支援活動に参加させて頂きたい。

第 2 回ボランティアセンター学生スタッフ研修会
（横浜市立大学ボランティア支援室との交流会）

【日時】2020 年 12 月 27 日（日）13 時～16 時／開催：オンライン（Zoom）
【内容】コロナ禍におけるボランティアに関する意見交換
　　コンセンサスに関するワークショップ
【参加大学】横浜市立大学ボランティア支援室、
フェリス女学院大学ボランティアセンター

【スケジュール】
13:00~14:00 アイスブレイク
　　自己紹介、各ボランティアセンターの紹介、コーディネーター挨拶
14:00~15:00　コンセンサスに関するワークショップ
　　（フェリスを中心に実施）
15:00~16:00　コロナ禍におけるボランティアについて意見交換
　　（横浜市立大学中心に実施）

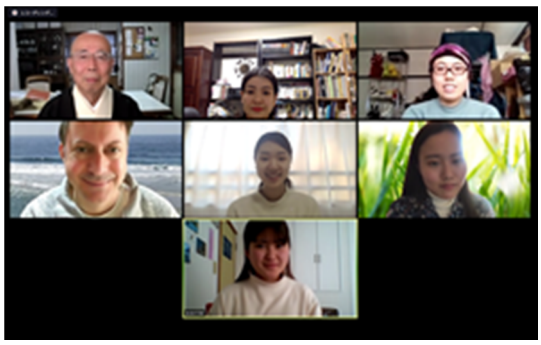
写真：他大学ボランティアセンターとの交流会の様子

第 3 回ボランティアセンター学生スタッフ研修会
（オンライン研修旅行）

【日程・場所】3 月 14 日（日）10 時～13 時／オンライン開催（Zoom）
【講演者】「リトアニアにおける日本との文化交流について（外務省派遣）」
「杉原千畝夫妻顕彰碑除幕式（静岡県沼津市）について」
静岡県／長興寺（禅宗）松下 宗柏　住職

【参加者】国際交流学部 2 年 3 名、英語英米文学科 1 年 1 名
ベンヤミン・ミドルトンセンター長、堀尾藍コーディネーター（計 6 名）

【スケジュール】
10：00～10：05　センター長挨拶
10：05～10：15　学生スタッフ自己紹介＆2020 年度活動の振り返り
10：15～10：45　Anne Frank House（オランダ）バーチャルツアー
（解説：ミドルトンセンター長）
10：45～11：00　質疑応答
11：00～11：30　新型コロナウイルス対策「手作りマスク作り」（学生スタッフ）
11：30～11：50　杉原千畝の生誕地・岐阜県を知るツアー
（岐阜県／下呂温泉・温泉寺（禅宗）岩淺宏観　住職）
11：50～12：00　質疑応答
12：00～12：30「リトアニアにおける日本との文化交流について（外務省派遣）」
「杉原千畝夫妻顕彰碑除幕式（静岡県沼津市）について」
（静岡県／長興寺（禅宗）松下 宗柏　住職）
12：30～12：40　質疑応答
12：40～12：50　研修会の振り返り（学生スタッフ）
12：50～13：00　閉会の挨拶（学生スタッフ）



第 2 回学生スタッフ研修会　集合写真

新型コロナウイルス感染防止対策として
学生スタッフが布マスク製作体験しました

【参加学生スタッフの感想】

1. 研修旅行について良かった点や今後、活用していきたい点は何ですか？

・バーチャルでの旅行は初めて体験したが、ウィズコロナを意識して生活していく必要が生じてきた現代ではどこへいくにも何をするにも考慮すべき点がたくさんあると感じた。直接目にし、雰囲気を感じるに越したことはないと考えていたが、海外はもちろん県外にも簡単にいくことが難しいこれからは、バーチャルという新しい方法は今後一般的になっていくのではないかと感じ、それをボラセンという気軽に参加できる団体で体験できたことが良かった。

・世界平和や日本の文化、宗教などが一日で学ぶことができたのが、研修旅行で良かった。

2. 一番印象に残った発表は何ですか？

・アンネ・フランクハウスの提供する『アンネの日記』の動画です。もしアンネが日記帳ではなくてカメラをもらっていたら…という斬新な設定のもとアンネの日記に記載された内容をかなり忠実に再現されていた点が印象的だった。一方で、活字でアンネの書き出す世界を想像しながら読む楽しさや、学ぶべき点を動画にしてしまう残念さも感じられた。もしアンネの日記を読んだことがなく、最初に動画を見た人がいるなら、そのあと実際に文献も目にしてほしいと感じた。

・アンネ・フランクがもし手書きの日記ではなく、ビデオ日記で記録していたらというドラマが面白かった。戦争体験者が亡くなっていくと同時に戦争の知らない人々が増加しているが、アンネが体験した過酷な当時の状況を目で見えるのはインパクトが大きいと思った。

・合掌村の案内。時間や遠隔である事を忘れ、話を聞きながら実際に観光しているように感じた。

3. 今後どのような企画に参加されたいですか？

・アンネバラの育成プロジェクトに継続して参加していきたい。

・次は可能な限り現地でのイベント企画に参加出来たらいいなと思った。

・一人暮らしや貧困で苦しむ人が簡単に、安くできる料理や手作りの何かワークショップで行い、生活の小さな手助けができるようにしたい。

4. 参加した感想を聞かせて下さい。

・このようなご時世でマスク作りも大切だが、アンネバラのポプリ作りが楽しみだったので、少し残念だった。

・今年度は皆さんと直接お会い出来ず残念だった。来年度はお会い出来ればと思った。

Ⅲ　ボランティアセンター資料

○ボランティアセンター規程

2003年1月23日制定
2007年1月25日改正　　2007年5月17日改正
2015年3月12日改正　　2016年3月24日改正

（設置）

第１条　フェリス女学院大学学則（1965年４月１日制定）第42条の２の規定に基づき、フェリス女学院大学（以下「本学」という。）にボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

（趣旨）

第２条　この規程は、センターの組織運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第３条　センターは、本学の教育理念である“For　Others”の精神のもと、次に掲げるボランティア活動に係る諸事業の推進に当たることを目的とする。

(1) 学生のボランティア活動に係る情報の収集・提供、参加機会の紹介に関する事項
(2) 学生のボランティア活動事業の企画・立案に関する事項
(3) 学内のボランティア団体への支援に関する事項
(4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に必要な業務に関する事項

（センターの施設）

第４条　センターは、緑園キャンパスに置く。

（センターの構成）

第５条　センターには、センター長、ボランティアコーディネーター(以下「コーディネーター」という。)、センター職員及び学生スタッフを置く。

（センター長）

第６条　センター長は、センターを代表し、その運営等を統括する。

２　センター長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　センター長は、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

（コーディネーター）

第７条　コーディネーターは、センター長を補佐し、センター業務を行う。

２　コーディネーターは、事務嘱託１名とし、ボランティア活動に経験と見識を有する者をもって充てる。

３　コーディネーターは、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

（センター職員）

第８条　センター職員は、センター長及びコーディネーターの指示のもと、センター業務を行う。

２　センターは、必要により臨時職員を、センター職員として置くことができる。

（学生スタッフ）

第９条　センターは、センター業務の運営に当たり、学生の参加と協力を求めることができる。

２　学生スタッフは若干名とし、公募に応募した本学学生の中からセンター長が委嘱する。

３　学生スタッフの活動期間は原則１年とし、再任を妨げない。

（委員会）

第１０条　センターの運営に関する諸事項を審議するため、ボランティアセンター運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する事項は、別に定める。

（その他の事項）

第１１条　この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

（庶務）

第１２条　センターに関わる事務は、コーディネーター及びセンター職員が行う。

（規程の改廃）

第１３条　この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附　則

この規程は、2003年３月１日から施行する。

附　則

この規程は、2007年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、2007年５月17日から施行し、2007年４月１日から適用する。

附　則

１　この規程は、2015年４月１日から施行する。

２　改正前の第４条関係委員会に関する事項は、ボランティアセンター運営委員会規程で別に定める。

附　則

この規程は、2016年４月１日から施行する。

○ボランティアセンター運営委員会規程

2015年3月11日制定
2017年3月10日改正

（趣旨）

第１条　この規程は、ボランティアセンター規程（2003年１月23日制定）第10条の規定に基づき、ボランティアセンター運営委員会（以下「委員会」という。）の構成、運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

（委員会の構成）

第２条　委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

(1) ボランティアセンター長（以下「センター長」という。）
(2) 各学部から選出された教員　各１名
(3) 教務部長
(4) 学生部長
(5) 国際部長
(6) 宗教主事
(7) 大学事務部長
(8) その他委員会が必要と認めた者

２　委員の任期は、前項第１号及び第３号から第７条までに掲げる委員についてはその職に在任する期間、同項第２号に掲げる委員については２年、第８号に掲げる委員については１年とし、再任を妨げない。

（審議事項）

第３条　委員会は、ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営に関し、次に掲げる事項を審議するものとする。

(1) センターの運営方針に関する事項
(2) センターの事業計画及び管理運営に関する事項
(3) センターの日常業務の指針に関する事項
(4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に関する重要事項及び必要と認められる事項

（運営）

第４条　委員会に委員長を置き、センター長がこれに当たる。

２　委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

３　委員会は、定例委員会及び臨時委員会とし、定例委員会は原則として毎年度１回開催するほか、臨時委員会は、必要あると認めたときに随時招集する。

４　委員会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。

（議決の方法）

第５条　委員会の議決は出席者の過半数をもって決定し、可否同数のときは議長がこれを決する。

（記録）

第６条　委員会の議事については、議事録を作成し、センターがこれを保管する。

（報告）

第７条　委員長は、委員会の協議の結果を学長及び大学評議会に報告するものとする。

（その他の事項）

第８条　この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が決定する。

（庶務）

第９条　委員会に関わる事務は、ボランティアコーディネーターが行う。

（規程の改廃）

第１０条　この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附　則

この規程は、2015年４月１日から施行する。

附　則

この規程は、2017年４月１日から施行する。

ボランティアセンター運営方針

“For Others”の精神のもとで「新しい時代を切り拓く女性」を育成することは、フェリスの教育目標の一つです。しかしそのためには、授業を受けて試験やレポートでよい点をとるだけでは足りません。むしろ学生たちが、自分から社会に出て行って問題を発見し、その解決のための理念と計画を立て、他の人々と協力しながら行動してゆく能力を養う必要があります。ボランティアセンターは、こうした視点に立って、これまでは学生個人の自主性に委ねられてきたボランティア活動を、大学として積極的にサポートすることを目標としています。これと連動して、2003 年度から「ボランティア活動１，２，３」が単位化されました。

１．センターは、ボランティア活動を通して、学生と大学、社会（国内と国外）をつなぐ役割を目指します。

２．センターは、学生が希望する活動領域で、信頼できる活動場所を紹介できるよう、コーディネーターの指導のもとで情報の収集と調査を行います。さらにボランティアに関連する領域を扱う教員、地域の社会福祉協議会や他大学のボランティアセンターとの交流を積極的に進め、ネットワーク化を促進します。

３．センターは、センターを訪ねる学生たちの自主性を重視し、活動場所とのマッチングに配慮します。また大学と学生が、“For Others”の精神のもとで目的を共有する対等な人間であることを自覚し、学生たちと対話し、問合せや相談に対応します。またモニタリングを行うことで活動中の学生たちを支援し、活動状況を知ることと並んで、活動先で得られた貴重な経験の共有化に努めます。活動が終了した後は、学生自身による自己評価を促し、場合によっては成果を社会に還元するための活動を行います。

４．センターは、学生参画型の運営を目指します。とくに学生スタッフの募集と育成に努めます。学生の企画立案によるボランティア事業を支援するために、情報と場所を提供します。

５．センターは、学内のボランティア団体を支援します。各団体の目的と活動趣旨を理解し、ニーズを知るために話合いの場を設け、可能な支援について検討します。

６．センターは、写真展・講演会・ワークショップなどの催しと並んで、Newsletter の発行、ホームページの作成などによる広報活動を積極的に行います。

センターは、以上のような活動を通して、学生たちが、自分を含む人間や自然の「根源的な尊厳」に対する感性を養い、現代社会の抱える諸問題について「実践的な知性」を育み、そして社会における「市民参画型」の合意形成を促進するためのコミュニケーション能力を身につけてくれることを、場合によっては卒業後の進路につながってゆくことを、また大学が、社会的な貢献度と知名度を高めてゆくことを目指します。

（２００３年４月確定）
（２０１７年５月２４日一部改訂）

2020 年度ボランティアセンター活動実績

＜前期＞
4 月 2 日（木）、3 日（金）ボランティアセンター・バリアフリー推進室合同説明会→中止
4 月中旬　緑園東小学校ふれあい学習サポート・上白根中学校 AT 説明会　→中止

5 月 8 日（金）第 1 回（持ち回り）ボランティアセンター運営委員会
5 月 13 日（水）夏期国際機関実務体験プログラム説明会　→中止
5 月下旬　CIEE 海外ボランティア説明会　→中止
5 月～6 月　学校法人アジア学院　スタディツアー　→延期
5 月 27 日（水）第 2 回ボランティアセンター運営委員会（Zoom 開催）

6 月 7 日（日）、10 日（水）ボラセン＠オンライン新歓（参加学生：のべ 12 名）
6 月 13 日（土）ボランティアセンターオンライン勉強会（Zoom 開催）参加学生：9 名

7 月 1 日（水）第 3 回（持ち回り）ボランティアセンター運営委員会
7 月 11 日（土）泉区社会福祉協議会　フードバンク参加
7 月 22 日（水）以降、水曜実施　だんだんの樹「子ども食堂」学習支援（登録学生：4 名）
7 月 30 日（水）以降、火・木曜実施　踊り場地域ケアプラザ学習支援（登録学生：2 名）

8 月 24 日（月）以降、週 1 回実施　鎌倉ユネスコ協会　SDGs みらい塾講座（登録学生：2 名）
8 月 31 日（月）第 1 回学生スタッフ研修会（Zoom 開催／参加学生：9 名）
9 月 18 日（金）～22 日（火）なら国際映画祭　オンラインボランティア（参加学生：3 名）
9 月 24 日（木）以降、木曜実施　緑園東小学校ふれあい学習サポート（登録学生：4 名）

9 月 30 日（水）第 4 回ボランティアセンター運営委員会（Zoom 開催）

＜後期＞
10 月　秋のボランティアセンター説明会　→中止
10 月　春期国際機関実務体験プログラム説明会　→中止
10 月 26 日（月）第 5 回ボランティアセンター（持ち回り）運営委員会

11 月 7 日（土）～8 日（日）大学祭　展示参加　→中止
11 月　CIEE 海外ボランティア説明会　→中止
11 月 29 日（日）第 1 回 SDGs みらい塾 Online WS「COVID-19 で明るみに出た日本の格差問題」

12 月 14 日（月）世界人権デー・特別講演会「杉原千畝とリトアニア」
12 月 20 日（日）第 2 回 SDGs みらい塾 Online WS「女性に対する偏見」
12 月 23 日（水）第 6 回ボランティアセンター（持ち回り）運営委員会
12 月 27 日（日）第 2 回学生スタッフ研修会
他大学交流会（横浜市立大学ボランティア支援室）参加学生：10 名

1 月 9 日（土）第 18 回緑園新春コンサート　→中止
1 月 25 日（月）国際シンポジウム「日本と減災教育―ESD・SDGs の取り組みからみた減災の街づくりと海外とのパートナーシップ」
1 月 27 日（水）第 7 回ボランティアセンター運営委員会（Zoom 開催）
1 月 31 日（日）第 3 回 SDGs みらい塾 Online WS「ザンビアにおける基礎教育に対するコミュニティスクールの役割」

2 月 21 日（日）第 4 回 SDGs みらい塾 Online WS「コロナと SDGs」

3 月 8 日（月）第 8 回ボランティアセンター運営委員会（Zoom 開催）
3 月 14 日（日）第 3 回学生スタッフ研修会（Zoom 開催／参加学生：4 名）

学生スタッフ　年度末アンケート結果

実施日	学年	英文	日文	コミュ	国際	音芸	回答数
3 月 17 日	1 年	1	0	0	1	0	21
	2 年	0	2	0	10	0	
	3 年	0	0	0	5	1	
	4 年	0	0	0	1	0	

Q1：関心のあるボランティアセンターのプロジェクトは？

アンネのバラプロジェクト（4 名）
子ども食堂（学習支援、調理ボランティア）（3 名）
日本語学習支援（3 名）
国際協力プロジェクト（3 名）
緑園東小学校ふれあい学習サポート（2 名）
被災地支援ボランティア（2 名）
広報ボランティア（プロジェクションマッピング、動画制作等）（1 名）
演奏ボランティア（幼稚園、高齢者施設、障がい者施設等）（1 名）
寿町支援（炊き出し等）（1 名）
農業プロジェクト（野菜作り等）（1 名）

Q2：どのようなボランティアに参加したいですか？

他国の文化を伝えるイベント
植樹活動
介護施設でのふれあい
炊き出し
子ども食堂での学習支援
アフリカに関わるボランティア（特にルワンダ）
子どもと関わるボランティア
日本語教育
外国をルーツに持つ子を対象とした子ども食堂・学習支援

Q3：やってみたい企画はありますか？

新型コロナウイルスの影響を受け、厳しい状況に置かれている人々の支援
商店街活性化プロジェクト
日本語教育支援プロジェクト（オンライン）

Q4：ボランティアセンターの学生スタッフになった理由を教えて下さい。

自分の可能性を高めるため（11 名）

ボランティアが楽しいため（4 名）

友達づくり（1 名）

Q5：2021 年度も学生スタッフを継続されますか？

はい（73%）

いいえ（27%）

Q6：Q5 の理由を教えてください。

【学生スタッフを継続】

・提案したプロジェクトを実現したい。

・ふれあい学習等、これからも行ないたいボランティアがあるから。

・遠隔でしかボランティアに参加できていないため、対面で活動して、相手の実際の反応も知りたいと思ったため。

・センターの運営ではなく、ボランティアへの参加を中心に活動したい。

・今続けているボランティアを継続したいため。

・2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大によりほとんど活動に参加できなかったので、2021 年は出来る限り積極的に活動に参加したい。

【学生スタッフを継続しない】

・他にやりたいことが見つかったため。

・就活が落ち着くまで控えたいと考えているため。

・部活動を優先したい。

おわりに

堀尾藍コーディネーター

COVID-19 の感染防止として、多くの他大学ボランティアセンターが学生のボランティア派遣を中止にする中、当センターでは、2019 年度に動画制作プロジェクトチームが発足し、既に IT を利用した教材開発に着手していたため、円滑に既存のボランティアをオンラインに転換することができた。

以前、トロンの開発者である東京大学名誉教授坂村健先生と直接お会いする機会があり、研究者として、また実務者として、積極的に次世代の育成に取り組まれている真摯な姿に感銘を享受した。当センターも学生がボランティアをとおして、自己肯定感の達成や社会の課題解決を担っており、まさに本学の理念である「For Others」を基とし、循環型の社会へとつながっている。

COVID-19 の影響で、海外への移動が難しい中、各国が自国の魅力や家庭の大切さを再考する機会となった。一方で、普段、自宅に不在であった父親が在宅となることで、女性や子どもに対する暴力も顕著となり、現在、深刻な課題となっている。
当センターでは、長年、「意思決定を担う女性の育成」に取り組んでいるが、学生の可能性をのばすためには、やはり、優秀な女性を受け入れる社会構築も重要であると考える。

当センターでは、学生主体で、プロジェクトの企画・運営しており、企画の段階、プロジェクト実施中にコーディネーターが調整には入るが、プロジェクトの評価も学生自身が実施しており、次のプロジェクトへ活かされる。「ママと子どもに優しい街は、皆に優しい街」と考えており、各プロジェクトチームによる街づくりも今後の成果を期待したい。

各プロジェクトでは、勉強会を実施しており、COIVD-19 禍であるからこそ、広報誌の作成、第一線で活躍されている方々（または地域の方々）へのインタビュー等、新しい企画も誕生しており、「失敗は成功のもと」として、失敗から学ぶことの方が多いと考えており、当センターでは、今後もあたたかく学生たちを見守りたい。

以上

2021 年 3 月

2020 年度　ボランティアセンター年間活動報告書　　2021 年 3 月 31 日発行
発行・編集／フェリス女学院大学 ボランティアセンター
〒245－8650　横浜市泉区緑園 4-5-3　CLA 棟 2F

フェリス女学院大学ボランティアセンター

緑園キャンパス CLA 棟 2 階
〒245-8650
横浜市泉区緑園 4ー5ー3

TEL：045-812-8462
FAX：045-812-8467
https://www.ferris.ac.jp/information/campus-center/volunteer-center/